ロシア盲ろう教育の先駆者A.I.メシチェリャコフの生涯と仕事
－その継承と現代的意味－

宮 井 清 香*

Ⅰ．はじめに

アレクサンドル・イワノヴィチ・メシチェリャコフ（1923-1974）の業績として，まずあげなければならないのは,盲ろう児のための専門的な特別学校を創設したことであろう。それは，1960年に，モスクワから北東約70㎞離れたところにあるザゴールスク市（現在のセルギエフ・パサート市）に開設された。開設当初の定員は50人であった。当学校の特長は，第一に,「盲学校」や「ろう学校」ではなく,「盲ろう学校」であることである。このような学校は，現代のわが国ではもちろん，国際的にみても存在が少ない。現実的には，盲学校やろう学校で，盲ろう児のような重複障害児を受け入れているためである。

盲ろう重複障害（弱視や難聴の場合も含む）の子どもたちを，従来の盲学校やろう学校ではなく,「盲ろう学校」で教育するという思想は，メシチェリャコフのみによって築かれたものではない。その師であるイワン・アファナーシェヴィチ・サカリャンスキー（1889-1960）の思想に基づいている。サカリャンスキーは，ウクライナのハリコフに世界で最初の，盲ろう児のための学校「ハリコフ・クリニック学校」（1923-1938）を開設した人物である。「盲ろう児」の概念に含まれる子どもたちは，障害の程度や受障時期を踏まえると，非常に多様な障害像をもっている。その子どもたちの教育を,「盲児のための教育」や「ろう児のための教育」と考えずに独自の教育が必要と考え，盲ろう児のための学校を設立した点が，サカリャンスキーが成し遂げた主な仕事である。そのサカリャンスキーの偉業を引き継ぎ，さらなる発展を目ざした人物がメシチェリャコフであった。

本稿では，メシチェリャコフの生涯や仕事を振り返ると同時に，メシチェリャコフが成し遂げた仕事についての現代的な意味を問うこととする。

Ⅱ．メシチェリャコフの生涯と仕事

1．メシチェリャコフの生涯（1923-1974）

メシチェリャコフは，1923年12月16日に，リャザン州スコピンスキー地区グメンカ村の

* 東京学芸大学附属特別支援学校

農家に生まれた。1941年の夏に戦線に赴くが，1943年の秋に重傷を負い，除隊してしまった。その後，1944年にグーブキン記念石油大学に入り，そこで1年間学んだが，心理学に興味をもったため，1945年にはロモノーソフ記念国立モスクワ大学哲学学部心理学科へ入学する。

メシチェリャコフは，大学の最終学年のときに，ルリヤ教授の指導を受けながら，ブルデンコ記念神経外科大学高次神経生理学研究室で上級研究員として活動した。大学卒業後は，教育科学アカデミー心理学研究所の大学院生となる。1952年には，ルリヤ教授*[1]と一緒に欠陥学研究所に移ることとなり，1953年に，『局在的疾患のケースにおける単純反応の2つの相互関係の障害』という題目の修士論文を提出した。

1955年からは，上級研究員として欠陥学研究所で仕事をした。ここでサカリャンスキーと出会ったことにより，メシチェリャコフは，盲ろう児の研究と教育の問題に関心をもつようになった。メシチェリャコフは，欠陥学研究所の盲ろう教育研究室を命が果てるまで指導した。また，盲ろう教育に関する数々の論文を残している。メシチェリャコフはサカリャンスキーの考えを継承しながら，盲ろう児の最初のコミュニケーション手段の発生という心理学的条件の問題を中心とした研究を行った。

このような科学的な仕事と同時に，メシチェリャコフは，自分の大学の先生であるレオンチェフ*[2]とルリヤ，同僚であるオリガの助けを借りて，モスクワ近郊のザゴールスクに，盲ろう児のための「子どもの家」を開設した。メシチェリャコフは，その学校の科学的な研究の指揮をとっていた。

また，メシチェリャコフの主導で，欠陥学研究所に附設して，盲ろう教育のための教員を養成する講座を組織した。同時に，盲ろう教育のための学習指導要領の手引きを作成し，主要な科目の学習指導要領の教材を出版した。

メシチェリャコフは，子どもたちを日々観察することにより，深い科学的な結論づけ，示唆に富んだ研究を行い，1971年5月に，博士論文『盲ろうあ児（教育の過程における心理発達）』を提出したものの，すでに彼は長期間，病床についていた。1974年，病院での当面の治療後，メシチェリャコフは，急性心不全によって51歳で生涯を終えた。1981年，メシチェリャコフとサカリャンスキーの死後，彼らによって成し遂げられた，盲ろう教育の科学的システムの確立に対して，ソビエト連邦国家賞が授与された。

2.「子どもの家」の開設

(1)「子どもの家」の概要

「子どもの家」は，盲ろう児のための寄宿制学校である。1963年に，メシチェリャコフやオリガ（1911-1982）などが創設した。サカリャンスキーも，亡くなる直前（1960）まで，この学校の創設に深くかかわっていた。「ハリコフ・クリニック学校」の閉設以後，サカリャンスキーも待ち望んでいた，盲ろう児のための学校なのである。

「子どもの家」が立地しているザゴールスクは，1340年代に創設された修道院の周辺に

できた村を起源とする都市である。ロシア正教会の中心地の一つであり，宗教都市の面影を保っている。かつてはミニチュアール（細密画）と木製玩具の製作が盛んであった。現在は，機械工業や種々の軽工業も発達している。1340年代に都市が成立されたさいは，「セルギエフ・パサート」という名の都市であったが，1930年に「ザゴールスク」という都市名に改められた。しかし，1992年に再び，「セルギエフ・パサート」という都市名に戻った。そのため，今日では，「セルギエフ・パサート子どもの家」と称される。

（2）開設当初の教育課程（1970年ころ）

「子どもの家」の教育課程は，欠陥学研究所の盲ろう教育研究室が作成したものである。教育課程は，準備段階と学校段階に分かれている。

1）準備段階

①目的および教育期間

盲ろう児に，衛生上の技能や身辺自立の技能を習熟させ，身ぶり表情*[3]や，指文字としての音声書記言語*[4]の基礎を習得させることを目的としている。準備段階は3歳児から入学できるが，2歳児で特別許可を得て入学することもある。

準備段階の教育期間は，入学時の発達段階，視覚，聴覚，話し言葉の喪失をもたらした疾患の特徴で決まる。家庭で準備教育を受けた者（欠陥学研究所職員の指導や助言に基づいて，家庭で教育を受けた者を含む）は，準備段階からすぐに，あるいは1-2年後に学校課程へ移る。家庭教育が不十分である盲ろう児の場合は，準備段階を終えるまでに4-5年を要する。

②教育計画

教育計画の一事例として，1969年度の準備段階第一グループの内容を示す。

（ア）継続して，日課時程に慣らす。

（イ）定位活動の教育：自分たちの部屋，廊下，洗面所，更衣室，食堂などにある事物の位置について正確な表象をもたせ，食堂やトイレへ一人で行けるように指導する。自分の物と他者の物を区別し，食事や授業中の自分の席がわかるようにする。

（ウ）身辺自立の習熟の形成と発展：発達段階に応じて，トイレの使用，着脱衣，自力での洗面や手洗い，正しく食事をすること，食後の後片づけなどを指導する。

（エ）遊びの指導：玩具と実物を対比すること，玩具の使い方を教える。

（オ）コミュニケーション手段の発達：日課時程の諸要素（食べる，寝る，着る，脱ぐ，行く，洗う，トイレ）を表す身ぶりを理解し，自分でも身ぶりで表現できるように教え，遊びのときの身ぶり（人形，玩具の家具や食器など）を教え，身ぶりによる指示（ボール，人形，茶碗，スプーンなどを持ってきなさい）を理解できるようにし，教授的な遊び（「ここにない玩具は何か？」に応じる遊び）で身ぶりの能動的な使用を強化し，友だちや先生の名前の頭文字を呼ぶ（指文字で）ことを教える。

（カ）感覚運動力の発達：塔の軸に輪を通すこと，マトリョーシカを集めたり分類したりすること，別々の小箱に棒や積み木を分類すること，ビーズを糸に通すことを教える。

点字や指文字によるコミュニケーションの習得を準備させるために，感覚運動力の初歩を始める。すなわち，ペグを点字板に取り出して並べること（見本に従って），指文字の形を模倣すること，点字の形態で，円い厚紙を貼り付けたカードを分類することを教える。より簡単な事物を粘土で作ることを教える。活動的な遊びや特別な練習で運動の発達を図る。

2）学校段階

①目的および教育期間

音声書記言語を教え，普通教育の知識や作業室のいずれかで働く技能を習得することが目的である。9年間を想定しているものの，期間は一指標にすぎない。「学校段階」では初等教育4年間分の普通教育を受ける。その後は，職業労働教育段階へ移行する。

②主要教科の教育課程

主要教科の教育課程について，表1に示す。この教育課程を目安として，生徒の発達段階に応じた教育課程が編成される。教育内容の順序や年次配分は，表1のとおりとは限らないことを前提としている。

表1　学年別教育課程例

学年	言語発達	実物教育	数学
1	指文字で単語を綴ること，点字の読み方と書き方を習得する。周囲にある事物の単語を指文字で覚え，指文字による簡単な指示を理解して実行すること，自分や他者の行為を簡単な文で表すこと，簡単な質問に答えることも含む。	学校内の建物全体を覚える。例えば，教室（床，壁，窓など），食堂（食器，食卓，椅子など），寝室（ベッド，ロッカーなど），洗面所（洗面台，蛇口など）がある。また，衣類，履物，野菜，動物などのテーマ学習で事物の名称や機能を学ぶ。	1-100までの数唱，それぞれの数を身ぶりや点字で表現することを学ぶ。カレンダーで，昨日，今日，明日という概念を身につける。球，立方体，直方体の弁別と製作を学ぶ。
2	指文字を用いて，さらに複雑な指示を理解できるようにすること，自分の願望を表現すること，質問に対して簡潔に答えることを学ぶ。	遠足，学校園や動物コーナーでの活動を行う。学校内の図書室，教員室などを覚える。家族，職業，果樹園，森などのテーマ学習を行う。季節や天候を学び，祝祭日行事に参加する。	100以上の加算（繰り上げなし），曜日の概念，円・正方形・三角形を学ぶ。
3	一定のテーマに基づいた会話を学ぶ。また，その日の出来事を指文字で表現することや，手紙を書くことを学ぶ。	学校内のボイラー室，シャワー室，食堂の食べ物，食器などを学ぶ。衣類，履物，家族などに関する名称をさらに学ぶ。農村見学に行き，家畜や耕作機械を学ぶ。魚類，昆虫などのテーマ学習を行う。	100までの数の加算（繰り上げあり）で3桁になる数を含め，1000以内の数の加算を学ぶ。数字，紙幣やコインの形，量の単位を学ぶ。
4	質問と応答の形で自発的な会話を行うこと，身近な他者に手紙を書くこと，体験した出来事を叙述することを学ぶ。	学校の建物の全体像を描けるようにし，各部屋の用途に関する知識を深める。遠足や見学によって，各種商店に関する知識を広げる。食べ物の形態，履物の素材の弁別，四季や月などを学ぶ。	1000以内の減算を学び，減算の応用問題に取り組む。
5	指示に対して，どのように遂行したかを詳細に述べること，指文字や点字で，読んだ本の内容を叙述することを学ぶ。	四季や植物に着目した自然カレンダーを作る。ウサギや魚などの飼育をしたり，植物を育てたりし，それぞれの知識を深める。	長さの単位，簡単な乗算，時間の単位を学ぶ。
6	学校や動物などのことに関して，会	四季ごとの天候や天候と労働の関係	割り算，目方の単位を学ぶ。

	話や作文で描写できるようにする。日記，遠足や見学の記録を書く。	を学ぶ。都市と農村の比較，公共施設などについて学ぶ。平地や丘陵などの表象を形成する。	
7	建物の内部や動物の大小を比較的に描写すること，テーマに基づいた日記などを学ぶ。	天候と収穫，自然現象と四季などのテーマ学習を行う。磁石，方位，部屋や家などの見取り図（凹凸図）の描写，縮尺の概念などを学ぶ。	簡単な小数や分数，100万以内の四則算，直線や線分を学ぶ。
8	一つの質問に対する多様な返答，自分の構想による作文，テーマに基づく作文を学ぶ。	四季の特徴，森林の植物と庭園の植物などのテーマ学習を行う。ジャガイモの栽培，朝・昼・夕方などの表象の形成を学ぶ。	単位の換算，時間の単位表などを学ぶ。
9	簡単な文学作品や科学に関する書物を読んだり，自分や他者の生活上の出来事を作文で書いたりする。	自然に関すること，人体のこと，国の歴史などを学ぶ。	ローマ数字，面積，体積を学ぶ。

Ⅲ．メシチェリャコフの盲ろう教育観

1．教育を受ける以前の盲ろう児の特徴

教育を受ける以前の盲ろう児について，メシチェリャコフ（1974）は「人間的な行動と思考を欠いた手のつけられない存在」と表現している。盲ろう児の初期発達は完全に独特で，眼が見え，耳が聞こえる子どもの発達と著しく異なることを強調している。その独特さは2点の特徴に帰着することが，メシチェリャコフ（1962）によって述べられている。

まず，触覚を用いて，外界に関する表象を形成することである。触覚は，盲ろう児にとって，外界にある事物を知るための重要な手段である。また，第二の特徴は，周囲の人々とのコミュニケーション手段を失っていることである。コミュニケーション手段を習得することができないままだと，盲ろう児は，絶対的な孤独に運命づけられ，完全に心理的発達の可能性を失ってしまう。視覚障害と聴覚障害の両方を重複することは，すでに習得している音声書記言語を喪失してしまうだけでなく，行動や心理機能にも大きな影響を及ぼす。

盲ろう児の教育に取り組むさい，最初のころは非常に困難な点が多い。なぜなら，盲ろう児は家庭で教育されずに放置されていることが多いためである。あるいは，大人による強制的な教育や対応を受けてきたからである。家庭で教育を放置されてしまった盲ろう児は，能動性，および運動への欲求を欠いている。周囲への関心はなく，一人では何もできなくなってしまう。そのため，盲ろう児は，座ったままの姿勢で上体を振り子のように揺すったり，手や上体を強く発作的に動かしたりすることがある。そのようなステレオタイプな運動を繰り返すことによって，彼らは自分の欲求を満足させているといえる。

適切な教育条件がなければ，「孤独」な「半動物的存在」にならざるをえない。そのため，盲ろう児に対して，目標を設定して人間的な心理や行動を形成するための適切な教育やきめ細やかな指導が必要である。盲ろう教育は，盲教育や，ろう教育と異なる。何らかの聴覚障害のある盲児は盲学校で学ぶことができないし，何らかの視覚障害のあるろう児

はろう学校で学ぶことができないのである。

2. 初期発達段階の重要な課題－身辺自立の習熟の必要性－

教育を受ける以前の盲ろう児は，人間的心理や人間的行動を失っている。人間的行動の本質は，自分の周囲にある事物（生活用品，道具，住居など）を適切に使うことにある。事物は，子どもを人間化する作用をもっている。事物を適切に使うことによって，人間的行動は構成されていく。

教育を受ける以前の盲ろう児にとって，周囲にある事物は，空虚で目的のない存在である。周囲にある事物の扱い方を教えなければ，人間的行動が形成されることはない。子どもは，事物の存在を知り，その使い方を習得することにより，その社会的価値や本質を理解することを可能にする。

盲ろう児が周囲の事物を理解する方法は，触覚・運動受容器（手，足など）によるしかない。盲ろう児の場合，外界を知覚する手段は，顔，手，足が主である。顔は，空気の動き，空気の大きな振動，温度などを知覚する。足は，地面や床の振動，凹凸などを知覚する。手は，事物の形を知覚するし，杖による知覚も可能にする。また，匂いも，それぞれの事物や状況を判断するための手段となる。しかし，周囲の環境を認識したいという欲求を有していない盲ろう児に，単に事物を持たせて理解させようとする試みは，不適切である。

さまざまな事物を盲ろう児に理解させるさい，まず，その子に定位反応を呼び起こさなければならない。定位反応を形成するためには，盲ろう児の生理的欲求*[5]に着目することから始まる。生理的欲求を満足させる過程により，周囲の事物を理解することが可能になる。最初は，単に生理的欲求を満足させる目的だけであるが，欲求を満足させるための事物やその機能を実際的に学ぶことによって，周囲を認識する経験が蓄積されていく。その蓄積はさらに，新たな欲求を生み出すことへつながる。新たな欲求をもとに，新たな活動の種類を形成する可能性をつくり出す。生理的欲求を満足させる過程にとって，身辺自立の習熟は重要である。

ここで，身辺自立を習熟させるための条件を示す。

(1) 安定した環境の必要性

周囲の事物を理解する環境として，空間での正しい定位を形成するための安定した環境を整える必要がある。それは，部屋や建物全体や庭などにある事物を一定の場所に配置しておくことを意味する。しかし，それは不変である必要はない。一定の環境で定位活動ができるようになったら，事物の位置を少しずつ変化させていかなければならない。なぜなら，日常生活では，変化に対応しなければならない場面に遭遇することもあるためである。

事物の存在を教えるさいは，その事物の全体像が形成されるようにする。全体像は，正確な定位を確立することをめざした，具体的な実践活動の基本的条件である。新しい事物の場合は丹念に触察させるが，同一の事物や少し変形した事物を再び知覚するさいは，そ

の事物の一部を触察するだけで事物の全体像が再現される。知覚は，すでに所有している形象が活かされる。

(2) 望ましくない習慣の改善

盲ろう児の場合，不適切な教育やかかわり方の結果を十分考慮する必要がある。盲ろう児に新たな習慣を形成させるためには，望ましくない習慣を改善させることに注意しなければならない。例えば，大人に食べさせてもらう習慣があった場合に，一人で食べる指導を始めると，盲ろう児は強く抵抗してしまう。盲ろう児に身辺自立の習熟を形成させることは，決して簡単なことでない。日ごとに抵抗を克服できるように，その子の能動性を注意深く観察し，支援の度合を調整しなければならない。なぜなら，適切な支援がなければ，その子の能動性は簡単に消えてしまう恐れがあるからである。

(3) 教師と子どもの共同行為（活動）

大人は子どもの手をとりながら，子どもと一緒に事物を扱う。このことを共同行為という。共同行為では，盲ろう児の発達段階や能動性に応じて，支援の手立てを変えていかなければならない。盲ろう児に身辺自立の技能を習得させるための，最初の段階では，大人は主導する立場にある。しかし，その子の能動性が高まってきたら，大人と子どもは一緒にその行為に取り組む。そして次第に，大人は，子どもの能動性に注意しながら支援を減らしていくようにする。一つの連続した行為の中でも，それぞれの行為に別々の支援をしていかなければならない。ある行為は子どもに能動性をもたせたり，他の行為は何らかの支援をしたり，あるいは見本を示したりするというような工夫が必要である。決して強制的であってはならない。

大人との共同行為によって行われていた身辺自立の技能は，次第に，盲ろう児自身の主体的活動に移行していくことが期待できる。盲ろう児の行動が主体的になったら，教師は子どもを見守り，失敗しそうになったり，危険な状況になったりしたときにだけ，補助的に支援することになる。

この共同行為の過程では，課題の設定が重要である。難しすぎる課題だと子どもの能動性は低下してしまうし，易しすぎる課題だと新しいことを学習できない。通常の生活では注意することのないような行動の一つ一つや細部を必然的に考慮する必要がある。

なお，模倣をさせるさいは，その行為や動作の結果を理解できるようにさせる。行為の結果として，どのような変化が起こるのか，という点についての表象が形成されるように留意する。

(4) 日課と時間定位

日課や時間定位を守ることが必要である。一定の日課に沿った生活は，盲ろう児が時間定位を習得できるようになるための重要な要因である。一定の日課に沿って，定められた時刻に，寝る準備や片づけをしたり，衣服の着脱をしたり，入浴をしたりすることが必要である。盲ろう児は，生活のリズムや日課を繰り返す過程で，一つ一つの事物の存在を知り，その機能を習得する。身辺自立の技能を学ぶ場合，そのための学習時間が設定されて

いるわけではない。日課に沿った生活をしながら，学んでいくのである。朝の日課を例にあげる。朝になると，教師が一人一人を個別に起こす。子どもたちは，起き上がると自分のベッドを整え，トイレに行く。そして，体操をし，洗面をし，着脱衣をし，食堂へ向かう。食事が済んだら，片づけをして，教室へ行く。教室では教師の合図により，学習道具を準備し，学習が終わったら散歩に出かける。このような日課が繰り返される。

日課は，時間標示を子どもに学ばせるだけでなく，活動の順序を理解することができ，次の時間までどのくらいの時間があるのかということも示すことができる。時間定位が可能になると，時計で時間を確認することを学習することができる。まず，朝食，昼食，夕食，就寝などを示す針の位置を覚え，後になると「1時間」という抽象的な単位も習得する。そして，時計の分単位，カレンダーの日・週・月・年も確認できるようになる。さらには，季節による天候の変化が指標となり，衣服や時候の変化に気づく。このように，盲ろう児にも，時間定位を確立することができる。

(5) 状況に応じた適切な表情や姿勢

人間は，顔の表情や姿勢によって，関心，喜び，怒りなどを表す。それらは一般的に，自然な状況で身につけていくが，盲ろう児の場合は困難を要する。しばしば，顔の表情は，関心，喜び，怒りなどの内的状態と一致しないことがある。例えば，喜んでいるはずなのに顔をしかめたり，不愉快なはずなのに微笑んだりしていることがある。

盲ろう児の場合は，状況に応じた適切な表情や姿勢を意図的に教育する必要がある。教師は，各状況に応じた適切な表情や姿勢を判断し，それを表現する。あるいは，顔の表情をかたどった石膏像を示す。盲ろう児は，それらを触ることによって，適切な表情や姿勢を身につけることを可能にする。

Ⅳ．メシチェリャコフの子どもたち

メシチェリャコフが教えた子どもたちの教育前，教育後の実態を述べる。メシチェリャコフ（1974）による記録に特記されている生徒について，抜粋して表2に示す。実態，予後等の詳しい記述は限られるが，表2より，メシチェリャコフの実践が，1，2例の成功例にとどまらないことがわかる。なお，メシチェリャコフの生徒は，表2で示した生徒だけでなく，他にも多くの生徒について記録されている。

表2の指導開始後の様子については，一定の指導後に得られた観察によるものである。指導開始後が示す時期は，子どもによって異なることを指摘しておかなければならない。なお，表2-1について，子どもの入学年齢は，推定1970年ころの年齢である。

表2-2の子どもたちは，「子どもの家」を卒業後に，大学への進学を実現することのできた4人の子どもたちである。1971年に，ロモノーソフ記念国立モスクワ大学に入学した。4人の盲ろう児が，大学進学を可能にしたことは，メシチェリャコフをはじめとする教師の存在があったことにより，実現した。なお，表2-2の内容は，本人によって記された資

料（坂本，1984）をもとにしている。

表2-1　メシチェリャコフの子どもたち（1）

名前（仮名）	性別	盲ろうの原因および障害の程度	入学年齢（学校名）	入学前の様子	指導開始後の様子
ニーナ	女	8か月のときにかかった脳膜炎の後遺症で，1歳6か月のときに盲ろうであることがわかる。	4歳（肢体不自由児園）	・座った姿勢で上体を前後に揺すり，時々，停止する。頭を左右に数回振って再び上体を揺する。 ・寝ころんだ姿勢から座ることはできるが，自分で寝ころぶことはできない。 ・右手を握り拳にし，顔を叩く。 ・一人で歩いたり，食べたり，排泄をしたり，着脱衣をしたりすることはできない。 ・事物を触察しようとする気持ちは見られない。 ・自分の身体に触れられることを強く拒否する。	・以前は立ち上がることができなかったが，一人で立ち上がることができるようになる。（「立ち上がる」ことを目ざす指導が行われた。足裏と上体を支えるといった支援方法であった。） ・一人で歩けるようになる。（一人の教師が手を握って前に誘導し，もう一人の教師がニーナの足を前後に動かすという支援方法であった。徐々に支援の程度を減らしていった。）
リータ	女	先天性両眼白内障，先天性ろうあである。光を感じる程度の視力はある。	2歳8か月（ザゴールスク子どもの家）	・身辺自立の習熟は形成されていない。 ・他者の支援があれば歩くことができる。 ・昼夜の区別はない。 ・食事のさいは，手で食べる。 ・排泄や着脱衣はできない。	・身ぶりを使うことにより，日課に慣れることから指導をした結果，時間を守って生活できるようになった。排泄，洗面，着脱衣などへの能動性が見られるようになった。 ・教師が手をつながないと階段の昇降ができなかったが，手すりを使って昇降できるようになった。 ・リータがスプーンを持つ手を教師が支えて口へ運ぶという支援をしていくうちに，自分でスプーンを使えるようになった。 ・食事のさいの規律を守れるようになった。
レーナ	女	先天性両眼白内障，先天性ろうあである。話し言葉はなく，身ぶりを用いることはない。	2歳（ザゴールスク子どもの家）	・大人に抱かれて過ごすことが多い。 ・他者の支援があれば歩くことができる。 ・身辺自立の習熟は形成されていない。	・大人に抱かれて過ごすことが少なくなり，一人であってもベッドで寝れるようになる。 ・建物内の部屋の位置や，部屋の中の物の配置を理解できるようになる。 ・スプーンを使って食事することを可能にする。 ・衣服の着脱が（ボタンのかけ外しも）できるようになった。

Ⅴ．おわりに

メシチェリャコフは，サカリャンスキーによる基礎理論に基づき，その理論の方向性をより明確なものにした。とりわけ，身辺自立の習熟についての基本的な条件は，メシチェリャコフ自身が実践を繰り返す過程で形成されたものである。その教育方法の特徴は，数

例のケース研究によって得られたものではない。サカリャンスキーの偉業を引き継いだメシチェリャコフなどが，盲ろう児のための学校を開設し，実践と研究を継続的に積み重ねてきた結果である。

サカリャンスキー，メシチェリャコフらによって築かれた盲ろう児教育の試みは，今日でも，その実践と研究が発展的に継承されているといわれている。十分に専門的な指導・支援の体系が確立している盲ろう教育の分野は，現在，他の重複障害教育にも推進的な立場をとっている。盲ろう教育で築かれた経験やその意義は，より一層，広く理解されると同時に，多くの障害児教育の分野で発展的に活かされていくことが期待できる。

表2-2　メシチェリャコフの子どもたち（2）

名前	性別	盲ろうの原因 および障害の程度	「子どもの家」入学前の様子	大学卒業後の様子
N．N． コルニェーワ	女	幼いときに視覚を失い，9歳のときに聴覚も失う。	盲学校在籍（2年間）後，盲ろう教育研究室に通い始める。判断・行為はしばしば不適当だった。主観的な解釈は現実から遠ざかり，混乱した。	ソビエト連邦教育科学アカデミーにある，一般心理学・教育心理学研究所の思考論研究室に就職した。「盲ろう児が精神文化に接近する過程における道徳意識の形成」が研究テーマであった。
Y．M． レルネル	男	4歳のときに髄膜・脳炎にかかったことにより，視覚を失う。7歳のときに再発し，聴覚も失う。	レーニングラード盲学校に在籍していた。集団行動はできなかった。	ソビエト連邦教育科学アカデミーにある，一般心理学・教育心理学研究所の思考論研究室に就職した。「感覚障害をもつ子どもに空間を認識させる粘土細工の役割」が研究テーマであった。
S．A． シロートキン	男	先天性のろうであった。視覚を喪失した年齢については，記されていない。	5歳から，ろう児のための幼稚園に通園していた。人間的行動の技能や習慣の基礎が全然なかった。	盲ろう者リハビリテーション部の上級技師として働き，広い公共活動を行う。全ソ盲人協会附属盲ろう者活動協議会の会議長を務める。
A．V． スヴォーロフ	男	視神経および聴神経の先天的な病気により，3歳で視覚を失い，9歳で難聴になる。	生後3か月から保育園に通い，3歳から幼稚園に通う。7歳のときに，寄宿制の盲学校に在籍していた。	ソビエト連邦教育科学アカデミーにある，一般心理学・教育心理学研究所の思考論研究室に就職した。「盲ろう児が精神文化に接近する過程における創造的想像力の形成」が研究テーマであった。

註釈

＊1　ルリヤ（1902-1977；アレクサンドル・ロマーノヴィチ・ルリヤ）は，ソビエト時代の心理学者である。人間の心理過程の発達を理解しようと試み，高次神経活動の理論を社会歴史的観点から構築しようとした。ルリヤは，生理学的，心理学的研究と臨床を結合した視点で，障害児の高次神経活動や脳の生体電気活動などの研究を進めていた。

＊2　レオンチェフ（1903-1979；アレクセイ・ニコラエヴィチ・レオンチェフ）は，ソビエト時代の心理学者である。一般心理学，児童心理学，教育心理学が主な研究分野であった。レオンチェフの主な研究として，人間の心理的過程や特性の発生・発達に関する研究，子どもの各種活動とそれらが子どもの心理発達に果たす役割についての研究，ヴィゴツキーによる研究の分析などがあげられる。

＊3　事物を扱う行為，事物触察活動のことを意味する。

＊4　音声言語」と「書記言語」を総称した用語である。いわゆる「話し言葉」と「書き言葉」を意味する。前者は，話し手の発話行動によって生じた音声による言葉を聞き手が理解するという一連のコミュニケーション活動で機能する言葉を意味する。後者は，文字記号を使用することによって表現する言葉である。

＊5　メシチェリャコフは，「生理的欲求」について，食欲（水を飲むことも含む），防衛欲（寒さや暑さから身を守る），排泄欲という3つの要素をあげている。なお，筆者は，このメシチェリャコフの考えに「睡眠欲」も加えて，「生理的欲求」と用いることにする。

文献

1）А. И. Мещеряков（1974）Слепоглухонемые дети－Развитие психики в процессе формирования поведения－. Педагогика, Москва.

2）А. И. Мещеряков（1962）Особенности первоначального развития слепоглухонемого ребенка. Известия АПН РСФСР, 121, 31-41.

3）А. И. Мещеряков（1968）К вопросу об отборе детей в школу для слепоглухонемы. Специальная школа, 129, 78-83.

4）А. И. Мещеряков（1969）Из истории обучения слепоглухонемых детей. Специальная школа, 1, 89-98.

5）著者不明（2003）Александр Иванович Мещеряков. Дефектология, 6, 81-82.

6）坂本市郎（1984）盲聾唖児教育－三重苦に光を－. ナウカ.